論文内容要旨

論文題名
Longitudinal Change of Quality of Life from Pre- to 3 Months after Treatment in Head and Neck Cancer Patients
（頭頸部癌術後患者の QOL に関わる因子の経時的変化について
―術前、術後 1 か月、術後 3 か月の比較―.）

掲載雑誌名　Supportive Care in Cancer（投稿中）

口腔リハビリテーション医学　田下　雄一

内容要旨
【緒言】
近年、若年者における頭頸部がん発生率は増加傾向にある。
頭頸部がんは胸部や腹部のがんと異なり、罹患部位の特殊性から治療によって、機能障害の後遺のみならず、整容および心理面に大きな弊害がもたらされることも多くみうけられ、QOL の低下に関する報告も多く認める。QOL は臨床試験における重要な結果として、また臨床上での意思決定においてより注目されてきており、治療結果を適正に評価するためには QOL を含め多角的に評価する必要があると考えられる。
しかし、従来行われている再発の有無、生存率、術後機能の評価などは限られた治療結果のみを評価しており、頭頸部がんの治療結果の評価としては不十分なものとなっている。
。そこで、本研究の目的は頭頸部がん治療患者に対し、治療前から多角的に評価を行うことで、治療終了後に出現する身体機能障害、口腔機能障害と QOL の関係を明らかにすることである。
【方法】
対象は本学頭頸部腫瘍センターにて切除術を行った頭頸部癌患者のうち、術前（PT)、術後 1 か月（1M)、および術後 3 か月（3M）に当科で評価検査を実施した 45 名（男性 23 名）である。QOL 評価には EORTC QLQ-C30 および H&N35 を使用した。QOL に関わる因子としては①筋力主要素、②口腔機能、および③摂食嚥下機能を検討することとし、これらに対応して①体重・筋肉量（SLM)・骨格筋量（SMM)、②口唇閉鎖力（LC)・舌圧（TP)、③Functional Oral Intake Scale（FOIS）を評価した。

【結果】
QOL 項目の変化について、PT-1M で有意に低下を認めた項目は「身体的機能」、「役割的機能」、「疲労」、「呼吸困難」、「感覚」、「会話の問題」、「人前での食事」、「他人との接触」、「開口」「体重増加」であった。1M-3M 間において有意な回復を認めた項目は「全体的な健康感」、「役割的機能」、「感情的機能」、「社会的機能」、「疲労」、「疼痛」、「不眠」、「食欲不振」、「嚥下」、「会話の問題」、「人前での食事」、「開口」であった。
PT-1M 間において、有意に低下した QOL 項目と強い相関を認めた評価項目は、「身体的機能」と①体重、BMI、②TP、③FOIS、「会話の問題」と②TP、「他人との接触」と①体重、BMI、SMM、②TP、③FOIS であった.
1M-3M 間において、有意に回復した QOL 項目と強い相関を認めた評価項目は、「役割的機能」と①体重、BMI、EF と③FOIS、「社会的機能」と③FOIS、「不眠」と③FOIS、「食欲不振」と③FOIS であった。
【考察と結論】
PT-1M 間、1M－3M 間を比較すると、異なる因子が QOL と強い相関を示した。このことから、頭頸部癌患者における QOL 向上のためには時期に応じた適切な対応が必要となることが示唆された。